

センター長就任のご挨拶



10月よりセンター長に就任しました稲垣 恭子です。どうぞよろしくお願いいたします。

私は、平成8年に京都大学教育学部に着任し、教育学研究科・教育学部で研究・教育、また研究科の運営にも携わってきました。センターの仕事はこれからというところですが、これまでの活動を基盤としつつ、学生や研究者の方々のネットワークを広げ研究・教育を支えていけるように、さらに積極的に進めていきたいと思っています。

待機児童や病児保育室の開設、研究・実験補助者の就労支援、学生を対象としたジェンダー科目の実施、メンター制度による相談、さらに女子高生を対象としたフォーラムや各種冊子の発行など、センターの活動は多くの教職員の方々のボランティアな協力によって支えられています。この場を借りまして改めて感謝申し上げます。

女子学生・教員の割合は、現状ではまだ必ずしも多くはない状況ですが、京都大学がのびやかで自由闊達な教育・研究の場であるように、センターのこれからの活動のありかたや課題についても議論をしていきたいと思っています。

皆さまのご協力をいただけますようどうぞよろしくお願いいたします。

全学共通科目（後期）「ジェンダー論」開講（オンライン授業）

落合 恵美子教授の全学共通科目「ジェンダー論」が10月5日（月）よりオンラインにて開講しました。現代日本のジェンダーを広い視野に位置付けて理解し、問題解決の方法について自ら考える力を養うことを目指した授業で、各回ゲストスピーカーを招き、さまざまな研究分野においてジェンダーが開くパースペクティブ、日本および世界の他の地域のジェンダーの状況や課題について講義いただきます。

2020年度全学共通科目（後期）「ジェンダー論」（Zoomによるオンライン授業）

■講義の時間：月曜日3限（13時00分～14時30分） ■講義の場所：Zoomによるオンライン授業

講師とテーマ

	日程	講師	講義テーマ
1	10月5日	筒井 竜平 朝日新聞大阪本社記者	新聞社の中から見たジェンダー
2	10月12日	山内 淳 生態学研究センター	なぜ性があるのか ― 進化生態学的視点から
3	10月19日	中村 沙絵 アジア・アフリカ地域研究 研究科	ジェンダーのあたり前を問い直す ― 人類学者マーガレット・ミードの著作から
4	10月26日	川島 隆 文学研究科	メルヘンを読み直す ― ジェンダー論的な視点から
5	11月2日	落合恵美子 文学研究科	ジェンダーの20世紀体制とその変容
6	11月9日	樋口 恵子 評論家	女性の市民運動から生まれた介護保険法
7	11月16日	大沢 真理 東京大学名誉教授	日本のジェンダー政策 ― 男女共同参画社会基本法の起草を中心に
8	11月30日	吉田万里子 国際高等教育院	EU及びドイツ等におけるジェンダー法制と実務
9	12月7日	丸山 里美 文学研究科	女性の貧困
10	12月14日	伊藤 公雄 京都産業大学	男性学・男性性研究の過去・現在・未来
11	12月21日	中里 英樹 甲南大学	ジェンダー平等と父親の育児休業の国際比較
12	12月28日	片田孫朝日 灘中学校・高等学校	男性のワーク・ライフ・バランス
13	1月18日	鈴木 和代 医学部附属病院	多様性をインクルーシブイノベーションに繋ぐ ― 女性医師/医学研究者の立場から
14	1月25日	鈴木 七海 GENESIS 共同代表	性的同意の取り方

日経ウーマノミクスフォーラム 2020 バーチャルシンポジウム「描け！未来予想図」

今年の日経ウーマノミクスフォーラムは新型コロナウイルス感染症対策のため、2020 バーチャルシンポジウム「描け！未来予想図」としてオンラインにより開催されました。

協力大学として本学より5名の学生・大学院生が参加しました。「高校生WEB座談会」ではそれぞれのテーマのファシリテーターを務め、「Cheers! なんでも相談室」では参加者からの様々な疑問に答えました。

また、学生・大学院生プレゼンテーションコンテスト「My Dream～学びをベースに未来へ」の決勝大会が9月30日に行われ、「宇宙から医療へ」を発表された本学大学院理学研究科修士課程 円尾 芽衣さんが見事東和薬品特別賞を受賞しました。

決勝大会当日はリモートでの参加であったため、後

日、本学男女共同参画推進センターにおいて表彰式が行われました。そこで東和薬品株式会社 鈴木 友里 製品戦略本部製品戦略部開発管理課長より記念盾が授与され、円尾さんは「ありがとうございます。今後宇宙と医療を結び付けて何か研究が出来たらなと思っています。」と喜びの言葉とこれからの抱負を述べました。



「保活情報交換会」オンライン開催

9月25日（金）12時15分より、昨年度好評だった、育児・介護支援事業ワーキンググループ主催の「保活情報交換会」を今年はオンラインにて開催しました。

これは、来年4月保育所入所を目指す人その他研究者の保活（子どもを保育所に入れるための保護者の活動）に関心を寄せる人たちのために企画されたイベントです。主査である齊藤 真紀法学研究科教授の司会の下、まず保育所入園のタイミングや見学のポイントについて、吉永 直子農学研究科助教から説明があり、続いて昨年度の保活と今年度の保育所生活について経験者より体験談をお聞きしました。朱い実保育園長、風の子保育園長から、保育所から見た保活のポイントやコロナ禍での保育についてお話しいただき、京都市の保育利用申

込み手続きについての情報提供もありました。最後に、参加者のチャットによる参加も含め、活発な質疑応答や情報交換が行われました。

たくさんのご参加をいただきありがとうございました。令和3年度の京都市保育利用申込みについては、以下のサイトをご覧ください。

<https://www.city.kyoto.lg.jp/hagukumi/page/0000274712.html>



京都大学女性教員懇話会セミナーのご案内

日 時：2020年11月27日（金）12：10～13：00（途中入退室は自由です）

講 師：落合 恵美子氏（京都大学文学研究科教授）

演 題：「家族の変化についての科学的考察」

参加申込：以下の URL または QR コードから 11/25（水）までにお申込みください

https://forms.office.com/Pages/ResponsePage.aspx?id=DQ5IKWdsW0yxEjajBLZtrQAAAAAAAAAAAN__tfGrOZURFJINIY4MFQyTVFWUFpKN1hNU0VLUFpKVy4u

場 所：オンライン Zoom 11/26（前日）に Zoom URL をご案内いたします

対 象 者：男女共同参画に興味のある本学教員及び研究者、学生さんも大歓迎です。昼食をとりながらビデオ Off にしてお気軽にご参加ください！





小1の壁 その① 学童クラブと小学校生活

女性登用が進んでいるある大企業で、子育て中の社員が仕事と育児の両立の困難を感じ、職場のサポートが不可欠となる時期について調査したところ、それは、①つわりがひどくなる「妊娠2~4ヶ月」の頃、②子どもが夜泣きなどをする「職場復帰から2歳になるまで」、そして③子どもの生活スタイルが大きく変化する「小学校入学直後」であったそうです¹。そこで、今回は、組織的なサポートにつながることを期待して、③、通称「小1の壁」を取り上げたいと思います²。

保護者が就労・就学をしている小学生の多くは、放課後や長期休みを学童クラブで過ごします。地方公共団体が主催する学童クラブは安価ですが、保育所と同様に待機児童問題が存在します³。学校ごとに学童クラブが指定されている場合もありますし、選択の余地があっても、自宅や学校から子どもだけで通えるところは限られます。他方で、小学校と連携関係にある学童クラブでは、急な休校等でも臨時に午前中から開放してくれるなど組織的に対応してもらえることもあります。

学童クラブは、利用時間が保育所より短いことが多く、従来の通勤・通学時間のままでは、夕方、子どもたちが一人で過ごす時間が生じることがあります（小学校の登校時間次第では、朝も一人で過ごさなければなりません）。通常、子どもが自分で帰る（あるいは集団下校をする）のは比較的早い時間帯に限定され（例えば、17時）、それ以降は保護者のお迎えが必要になります。下の子が保育所に通っている場合、職場、学童クラブ、保育所の間に無理のない動線をひくことが、生活を回すのに重要です。給食がある保育所とは異なり、学校の給食がない長期休みにはお弁当が必要で、卒園した翌日からお弁当生活になります。

保護者が就労者であることを前提に行事を組む保育所とは異なり、小学校の各種の行事（入学式も）やPTA活動の多くは、共働き世帯が多くを占めるようになった現在においても、平日の日中に行われます。学校からは毎日宿題が出され、持ち物の確認や勉強のサポートへの親の支援は当然のこととして織り込まれています。保育士と密にコミュニケーションをとれた保育所とは異なり、小学校から普段の子どもの様子を聞くことは難しく、行事や持ち物の連絡は山のように配付されるプリントだけであったりします。

子どもも親も疲れて帰宅し、食事、お風呂、宿題、明日の準備でヘトヘトになったところに、ランドセルの奥から、「〇月×日（明日！）松ぼっくりを10個学校に持ってきてください」と書かれたプリントが出てきて、夜の公園に拾いに出かける、といった事態も起こります。

子どもが小学校に入学する前後には、どのような家庭でも新しい生活のリズムに慣れるために精神的・時間的なゆとりを必要とします。柔軟なスケジュールが組めるよう、気軽に相談できる環境作りを管理職・指導教員は心がけたいものです。次回のコラムでは、具体的にどのように小1の壁に対応しているか、体験談をご紹介します。

（文責 育児・介護支援事業 WG 専用アドレス：ikwg@mail2.adm.kyoto-u.ac.jp）

- 1 石塚由紀夫『資生堂インパクト』（日経経済新聞出版社、2018）「第1章 子育てを聖域にしない 3. 3人の精鋭チーム」参照。
- 2 以下の記事には、職場の上司が知るべき「小1の壁」の情報がまとめられています。
<https://vdata.nikkei.com/newsgraphics/after-school-activity/>
- 3 年度ごとに申込みが必要な学童クラブは、低学年の児童が優先され、学年があがると入りにくくなることもあります。

連載：研究者になる！－第80回－

教育学研究科・助教 三野 和恵

●先祖の母国、台湾への思い

高校進学後、好きだった数学の成績が振るわず、古生物学者になる夢を諦めました。一方で、以前から好きだった世界史や漢文・古文・現代文の授業を楽しみ、歴史研究部に所属し、記事を書き冊子を作るうちに、歴史をやってみようと思うようになりました。そこで大学は、歴史学が充実している憧れの京大文学部を、不合格覚悟で受験。第二志望は、私に読書好きになるきっかけをくれた伯母の母校で、リベラルアーツ教育を掲げている国際基督教大学（ICU）でした。京大に落ちたのは残念でしたが、ICUのキャンパスや雰囲気は気に入る、合格後迷わず進学を決めました。大学の授業はどれも面白く、深く印象に残りました。例えば歴史学の授業では、奇想天外な内容の史料との向き合い方を学びました。また、キリスト教に関するクラスでは、その後大学院で思想やその歴史を考察する中で大きな影響を受けました。卒業論文は歴史学で、台湾のキリスト教をテーマにしました。台湾人でキリスト者の母を持つという自分の背景はあったものの、自分にとって台湾は「あまりよく知らない故郷」で、時折祖父母や他の親戚を訪ねて短期滞在するのみで、当然台湾語も話せませんでした。植民地教育を受けた祖父母とは日本語で、マンダリン教育を受けたいとこ達とは身振り手振りで、後には片言の英語で意思疎通をし、台湾の人々の他人に対するフレンドリーさや、活発さに魅了されました。こうした言語的・文化的な隔たりを超えて台湾のことをもっと知り、その社会の中に入っていきたいという願望が研究テーマの選択、台湾語やマンダリンの学習の動機となりました。同時に、植民地時代に育った祖父母の経験をもっと知りたい、理解したいという考えもありました。その時代にそれぞれ医師と教師になった祖父母は、共に教育の機会に恵まれた幸運な人たちであり、日本人の親しい友人も多くいましたが、例えそうした中でも植民地支配を受けるということで、決定的に傷つけられていたのだということを深く考えさせられました。宗教・思想について考える際に、とりわけこれらが植民地支配下を生きる／あるいは差別的な状況の中で生きる人々にとって、どのような意味を持ち得たのかという問題に関心を持つようになったのは、こうした背景があったからだと思います。

●目標は、研究成果を国内外に発信していくこと

京大教育学研究科へ進学後は、日本植民地支配下の台湾で活動したスコットランド人宣教師キャンベル・N・ムーディに焦点を当て、彼が被植民者とされた台湾の人々と出会う中で、「西洋的近代」と癒着した当時のキリスト教像を問い直し、台湾人の反植民地主義ナショナリズムへの共感的姿勢を表明するに至った経緯を分析しました。同時に、ムーディら在台宣教師が設立に関与し

た、台湾基督長老教会の聖職者・信徒らの教会新聞・神学雑誌上の議論も分析しました。その中で、これらの人々が日本による植民地支配や海外宣教師による文化的優越意識を前にしつつ、独自の仕方でもキリスト教を自らのものとして内在化してきたこと、「台湾人」でありまた「キリスト者」である者に固有の集団意識と使命感を構想・表明することで、自決権・社会正義・反植民地主義ナショナリズムと呼応し得るような、神学の萌芽を育てていった過程を捉えることができました。なぜムーディに着目し、彼と台湾の人々との出会いと相互関係を見ているのかということ、台湾とは深い繋がりを持ちつつも、自分自身はその社会の一員であったことはなく、そうなりたいと願っているという立場にあることが関係しているように思います。これは物語を読むことが好きという部分とも繋がっていて、スコットランド、エディンバラでの研究滞在期にも深く思わされましたが、慣れない世界、異なる世界、知らない世界に入って、色々な人たちと出会い、知らなかったことを見聞きし、学ぶことに喜びを感じるからです。今後は、台湾の地域社会と教会、植民地支配との関係をより細やかに見てゆくこと、そのためにも台湾語の史資料の収集と分析をさらに進めたいと考えています。また、これまでの研究を英語で発信することに努め、日本語以外の言語を使用する研究者とも、より活発に意見交換をできるようになることを目標としています。

●一歩ずつ、着実に進む研究者への道

これまで「研究者を目指す」と意識したことはあまりなく、むしろ迷いながら今やるべきことをやっていく中で、ここまでやってきました。その迷いは修士時代まで非常に大きなものでした。考えを素早くまとめ発言するのが苦手で、このまま研究者養成コースを進んでいく資格が自分にあるのかと悩みました。ですが、修士論文を提出し博士後期課程への進学が決まった時に、非常に大きな解放感と励ましを与えられ、研究はたとえ自分のような遅めのペースの人でも着実に継続することで、自分なりの方法で進めていけると思えるようになりました。コツコツ研究作業をしていく中でいつの間にか道が開かれ、徐々に研究者ようになってきたという感覚です。「やるべきこと」とは、自分がやり始めた研究を、やり始めたからには良いものにしなければいけないということであり、研究を進めていく上で助けてくれた、多くの人たちへの応答としての意味もあります。これからも感謝の気持ちを忘れず大事にし、ずっと研究を続けていきたいと思っています。

